

# 滋賀県蒲生郡蒲生町の水無月行事

——茅の輪くぐりの意味について——

## 橋 本 章

### 一、はじめに

茅の輪くぐりは、水無月祓（名越の祓、或は夏越の祓とも言う）の行事の一環として、毎年旧暦の六月晦日の日を中心各地の神社等で執り行われる儀礼である。人々はチガヤ（茅萱）で作られた茅の輪をくぐる事によって穢れた身を清め、或は病氣や厄除けのまじないとするのである。<sup>(1)</sup>

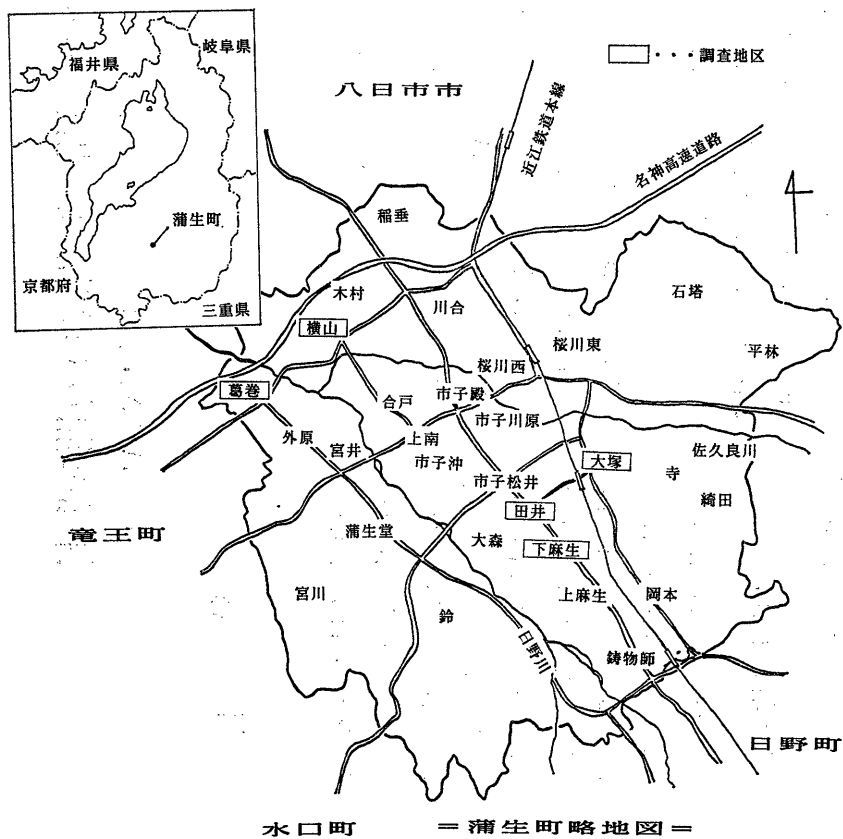
茅の輪くぐりの由来については、一般に『新日本紀』の備後国風土記逸文に記されている蘇民将来の伝承に因るとされている。<sup>(2)</sup> このため現在では、茅の輪くぐりと疫神である牛頭天王（『スサノヲノミコト』）とは、蘇民将

来の伝承を介在として深く結びつけられ、理解されているように思われる。<sup>(3)</sup>

さて茅の輪くぐりについては、今も数多くの事例が現存し、また文献も多数見受けられるにもかかわらず、特に民俗学の立場からの研究は、ほとんど行われていないのが現状である。<sup>(4)</sup> 本稿では、滋賀県蒲生郡蒲生町に伝わる茅の輪くぐりの事例を五例報告すると共に、茅の輪くぐりに対する従来からの理解に対し、私なりの検証を試みようとするものである。

### 二、蒲生町各地の水無月行事

(一)、葛巻の水無月行事



葛巻（かずらまき）は蒲生町の北西側にあり、ちょうど佐久良川が日野川と合流して竜王町へと流れ込むあたりに位置している。一見水の便は良い所のように思われるが、葛巻は昔から水に対して大変な苦勞を重ねてきた村なのである。現在もこの近辺の村落には江戸中・後期の水争いの様子を伝える古文書が伝えられている。<sup>5</sup>葛巻とその周辺の三村（宮井・宮川・外原）には、かつて五里井と呼ばれた湧水地があり、四か村でその権利を所有していた。五里井の五里とは、四つの村と、日野川からの取水口がある葛巻が持つ二つ目の権利とを合わせて呼んだものである。<sup>6</sup>葛巻の水無月行事には、この五里井を管理する為に各村から一名ずつ出されたユトウ（井頭）が深く関わっている。

葛巻のユトウは、村の男性戸主の中から各男性の結婚した順番に一年交代で選ばれてゆく。現在では圃場整備の進行と共にその役割も有名無実化してはいるが、葛巻では今も毎年ユトウが選出されている。葛巻の水無月行事の中で、茅の輪作りなどの子供達の世話の一切を引き受けるのがこのユトウの役割なのである。<sup>7</sup>

七月三十一日の午後四時頃、ユトウと葛巻の小学生の男の子八人が、村のはずれにある野神を祀る小さな森に集まり、茅の輪などの作り物を始める。材料となるチグサ（茅草<sup>8</sup>）は、子供達が七月二十九日に、これも村のはずれにある墓の周りから根っこごと引き抜いてきて小川に浸し、野神の前に簀を敷いて干しておく。ユトウは子供達に手伝いをさせながらチグサを束ね、持ってきた青竹を縦割りにして、直径一・五メートル程の円形の芯を作り、その周りにチグサの束を巻つけてゆく。そしてそれが出来上がると、今度は同様のチグサで直径五〇～六〇センチ程のやや小さめの茅の輪を作る。その後、長さ一メートル、太さ一〇センチ程の青竹の先端に少し切れめを入れた「バンバラダケ」と呼ばれるものを二本と、同じく二メートル程の長さに切った少し細めの青竹三本に、それぞれ水・無・月と半紙に書かれた旗を付け、先には茄子を付けたものを作り上げる。

全ての作り物が出来上がると、野神の木に小さい方の茅の輪を供え、午後五時頃、子供達は行列を組んで葛巻の集落の方へと出発する。先頭はバンバラダケを持った



葛巻の茅の輪

一番小さい子供二人で、この子たちがバンバラダケを地面にバンバンと叩きつけながら行列を先導する。その後を水・無・月と書かれた旗を持つ子供が三人続き、最後に年長の子供三人が茅の輪を持ってゆく。ユトウはその後ろを軽トラックを運転して続く。

行列は葛巻の集落を練り歩き、浄土宗安楽寺の境内へと入ってゆく。寺では鎮守である永見神社の今年の年番神主が待っていて、一行が到着すると寺の門をくぐったすぐ左の脇にある津島の祠へ一緒に参り、その端に水・無・月の旗を立てる。そしてユトウと神主は寺の門の片側の門柱に茅の輪を立てて括り付ける。こうして水無月の行事は終了し、子供達が家に帰った後は、神主とユトウとが寺の前でちょっとした酒盛りをしながら、お参りに来る人待つのである。葛巻では茅の輪をくぐるのに特に決まりはなく、いつ誰がくぐってもよい。人々は思い思いの時間に寺にやって来て、特に作法もなく茅の輪をくぐってゆくのである。

この後、茅の輪は八月十五日までこの場に置いておかれる。そして十五日には取り外して村はずれにある消防

署の裏手の広場に運び、ここで火をつけて燃やす。この火はお盆の送り火にする為に、各家の人々が蚊取り線香などに移して持って帰るのだそうである。

その他に葛巻では、昔水無月の日の行事として「ハラミモチ」という餅菓子を食べたそうである。これは餅の中にあんこをたっぷり入れてガンタチイバラの葉で包んだもので、ちょうどこの時期が稲穂が実り始める穂争みの頃に当たるところから、それになぞらえて豊作を祈願しつつ食されたとの事である。

#### (二) 横山の水無月行事

蒲生町横山の茅の輪は、周辺の他地域のそれとはちょっと変わった形態を持っている。地元の子供達が「ワ」あるいは「トリイ」と呼んでいるそれは、高さ二メートル強、横幅一・五メートルの長方形をした大きなもので、その上部には花の飾り付けがなされるが、その材料にはチグサがほとんど使われないのである。

横山の小中学生男子（小学生一人、中学生六人）は七月三十一日の午前中に鎮守の櫓（いちい）神社に集ま

り、社守の指導のもと茅の輪作りを始める。社守は櫓神社の年番神主で、毎年横山の集落で組織される宮座の大人衆一二人の、座入り前の役職である。

茅の輪は先ず、少々太めの青竹を二メートル強のものと一・五メートル程のものを各二本ずつ用意し、これを藁縄を使って長方形につなぐ。そして青竹の回りに笹の枝や葉を同様に藁縄で巻き付け、上になる部分よりやや下に青竹をわたし、その上にロトブを張ってそこにたくさんの菊などの花で飾り付けをする。そして最後に三つ編みにされたチグサを使って、茄子とナシを花飾りのあたりに括り付けて出来上がりとなる。このチグサだけは前日に子供達が近くを流れる佐久良川から根っこごと抜いてきて、その場で三つ編みにしておいたものを使用する。花飾りの部分には水がたっぷりとかけられる。完成した茅の輪は午後まで一旦神社の拝殿に置いておかれる。

午後一時、子供達と、今度は袴に着替えた社守が再び神社の境内に集まる。子供達のうち小学生が輪を担いで本殿の前に立てると、社守は手に御神酒の入った箱（御



横山の茅の輪くぐり

神酒すず)を持ちながら本殿側へ向かって輪をくぐり、本殿に御神酒を捧げてお参りをして再び茅の輪をくぐって戻ってくる。それが終わると小学生の子供達が茅の輪を高く持ち上げて神社を後にし、一路村内の浄土真宗永福寺へと向かう。永福寺に着くと、境内の一角にある「八幡さん」と呼ばれる祠の前に行き、櫛神社の場合と同様に祠の前に茅の輪を立てて杜守がくぐり、お参りをして戻ってくるという所作をする。これらの儀式が終わ

ると子供達は茅の輪を櫛神社に持ち帰り、今度は中学生達がナタで茅の輪を叩き壊してしまうのである。

こうして水無月の行事は全て終了するのだが、この後横山では碎いた茅の輪を焼く「アマゴエヤキ」と呼ばれる行事が行われる。八月七日の午前中に、村の大人達はアマゴエヤキの草刈りと称して、この行事が行われる場所付近の草を刈る奉仕作業をする。そしてこの日の午後一時頃に子供達が櫛神社の境内に集まり始め、中学生の指示のもと、小学生達がリヤカーを持ち出してきて茅の輪の残骸を乗せ、決められた道を通って、村から少し離れた所にある墓の近くの小高い丘、通称アマゴエヤキノバに向かう<sup>⑩</sup>。小学生達が丘の上の広場まで茅の輪を運んでいる間に、中学生達は近くの藪へ青竹を切り出しに行く。およそ五、六メートルはあろうかという長い竹が広場に運び込まれると、中学生は竹の枝を先端部分のものだけを残して打ち払い、広場の中央に杭を打つ。そして小学生達は森の中に分け入って松の枯れ枝を集めてくる。杭打ちが終わると竹にロープをかけて、全員で竹を広場の中央に立てる。そしてこれの三方にロープをしっか

りと張り、打ち込んだ杭に竹を縛りつけて、その周りに茅の輪の残骸を積み上げ、その上に更に松の枯れ枝を載せてゆく。出来上がったものは八月十三日の朝九時に子供達によって火がかけられ、横山の人々はこの火を蚊取り線香などにうつして持ち帰り、思い思いの時間に日野川の川原に出て、迎え火の火種として使用する。

横山の水無月行事は、式次第についてさほど昔と変わった部分はないそうであるが、茅の輪のつくりが現在では大分小振りになってしまったのだそうである。昔は茅の輪の大きさは横一間（約一・八メートル）・縦一間半（約二・七メートル）と決められていた。これは現在のものと比べてもかなり巨大なものであるが、昔はこれを運ぶ時も立てて持っていたそうで、茅の輪の持ち手は八人とされ、四人が茅の輪を支えて持ち、残りの四人は茅の輪の花飾りのところに綱を張って倒れないように引いたという。

また花飾りの部分は、まずここにチグサを編み目のように張ってそれ自体が飾りのように設らえたらしく、また花は竹で作った花入れを茅の輪に付けて、そこに水を

入れて飾ったのだという。

#### (二) 田井の水無月行事

田井の水無月行事は、集落のはずれにある天満宮で茅の輪を作るところから始まる。材料となるチグサは、一週間程前に川原などより刈っておき、天満宮境内の拝殿に干しておいたものを使用する。昔はチグサを刈ってしまわずに根っこから引き抜き、数日小川に漬けておいたそうである。七月三十一日の午後一時過ぎより大人たちが天満宮に集まりはじめ、茅の輪作りを始める。輪といっても田井の茅の輪は長方形であり、先ず境内の竹藪から青竹を切り出して、これで縦二メートル、横一メートル程の枠を作る。そしてその周りにチグサを束にしたものを次々と巻きつけ、最後に茅の輪のてっぺんの部分に「マクラ」と呼ばれるチグサを束ねたものを据え付けて完成となる。その他に田井では、作り物として「ホウキ」という一・五メートル程の青竹の先端にチグサの束を括り付けたものを六本作る。出来上がった茅の輪には清めの塩がふられた後、天満宮の本殿の前に立てかけられ、



田井の茅の輪くぐり

ホウキはその両脇に三本ずつ置かれる。作り物が終わると大人たちは拝殿で宴を張る。

午後三時二〇分頃より田井の小中学生八人（小学生六人、中学生二人）が天満宮にやってくると、大人たちは宴会をいったん切り上げて天満宮前の茅の輪を持ち出し、二人の大人が支えて本殿と拝殿の間に立て、先ず神主と

呼ばれる人が拝殿側から本殿側へ向かって三度茅の輪をくぐる。それが終わると輪を左右で支えていた者たちがクルクルと右回しに茅の輪を三回回転させる。その後を今度は他の男たちが次々と輪くぐりをはじめ、全員がくぐり終えると茅の輪はまた回されるのである。

天満宮での輪くぐりが終わると、茅の輪は田井の集落の方へと向かう。小学生の子供達六人がホウキを持って先導し、その後を茅の輪を持った中学生が続く。一行は集落にさしかかると「ワが来たぞ」と家々に触れて回り、人々に輪くぐりをしてもらう。くぐり方は先程と同様で、三度くぐった後輪が三回回転される。集落の中では人々が茅の輪の来るのを待っていたり、通りがかったは輪をくぐったりと様々で、子供達はその度に茅の輪を道に立ててくぐってもらい、またクルクルと回してゆく。田井の茅の輪は中風封じと言われており、老若男女誰がくぐっても良いのだという。

ほぼ全ての人にくぐってもらい、集落のはずれまで行った茅の輪は再び天満宮へと引き返し、本殿の裏に置いておかれる。この茅の輪は一月十四日のドンド焼きの日



に門松などと一緒に燃やすのだそうであるが、昔は田井と隣の市子松井との間を流れるフルゴ（古川）と呼ばれる小川に流しに行ったのだそうである。流す場所はフルゴを挟んで田井と市子松井との間を結んでいたコイノハシという橋のあった所で、ここでは水無月の日に田井の子供と市子松井の子供とが茅の輪を持ちよってケンカをし、勝った方がフルゴに茅の輪を流すことが出来たのだそうである。

#### 四、大塚の水無月行事

大塚の水無月行事は、集落の中心にある野神の森で茅の輪を作る事から始まる。大塚はおよそ八五戸と蒲生町では比較的大きな集落で、水無月の行事や山の神などとは大塚の中の三つの字が持ち回りで勤め、その当番の年には集落から年番の神主が二人づつ半年交代で選出される。その三つの字とは山出四三戸、北出（下）三二戸、そして上のツツミ一〇戸である。その順番は北出↓山出↑上のツツミとなっているのだが、上のツツミは戸数が少ない事から、一度当番を勤めると次の時はとばして北出↓

山出の順に役を回す。

一九九四年は北出がその当番であった。七月三十一日の正午過ぎに触れ太鼓が叩かれると「シヨコウ（所郷）」と呼ばれる男性戸主達がそれぞれチグサを二束ずつ持って野神の森に集まる。またこの時竹藪を所有するものは竹を一本程持ってきてもらう事になっている。また神主は縄を用意しておく。集まった男達は、野神の木にトビウオと薄く切って塩水に浮かせた瓜、そして洗米と御神酒とを供える。全員で御神酒を頂いた後、いよいよ茅の輪を作り始める。先ず竹を割って何本かを重ね、それを直径二・五メートル程の輪にし、その周りに笹の枝をかませて形を整えながらチグサを巻いてゆく。巻いたチグサはさらにチグサによって括りつけられ、補強の為に縄で結ばれる。そして最後にチグサを使って蝶々結びの目を一か所作り、茅の輪は完成する。出来上がった茅の輪は野神に供えられ、神主が清めの塩をふりかけた後、先ずこの場で神主が輪くぐりをする。男達が輪を立てて神主がくぐると輪は一旦神主のくぐり抜けた方向に倒される。この動作を三回繰り返すのが輪くぐりの作法である。



大塚の茅の輪くぐり

なお大塚にて輪くぐりをするのはこの神主だけである。

野神の前での輪くぐりが終わると、シヨコウ達は茅の輪を高く担ぎあげて持ち出し、弁天溜と呼ばれる溜め池の前行く。この池の真ん中には弁天を祀る祠（弁天さん）があり、茅の輪は最終的にここに供えられるのである。一行は弁天溜の前のちょうど曹洞宗妙嚴禪寺の参道となつてゐる道に着き、そこにある津島の祠の前辺りに茅の輪を下ろす。そこでまた神主が茅の輪を三回くぐり、その度に輪が倒される。

神主が茅の輪をくぐり終えたと、輪はちょうど蝶々結びの結び目を作つた個所からナタで切断され綱状にされる。蝶々結びの結び目がちょうど頭のような格好になり、茅の輪は地元の人の言う「蛇」となるのである。これをシヨコウの中の若い衆五、六人程が持つて弁天溜に飛び込み、茅の輪（蛇）を泳がせるように弁天さんに向かう。祠に着いた若い衆は茅の輪を祠に巻つける様に置くと、お参りをして戻ってくる。こうして大塚の水無月の行事は終わる。

この他に大塚では水無月の日に「イバラダンゴ」と呼

ばれるイバラの葉で包んだ団子を、大きな稲穂が実りま  
すようにとの祈りを込めて神仏に供え、また食したそう  
である。大塚は元来水の便の悪い所であつたらしく、田  
に水を張るこの時期には水源の確保に相当苦労したそう  
である。現在では圃場整備も進み水の心配はさほどなく  
なつたが、水無月の行事はこうした水への思いから起こ  
つたのではないかと、お話をうかがつた年番神主の松本  
茂治氏は語ってくれた。

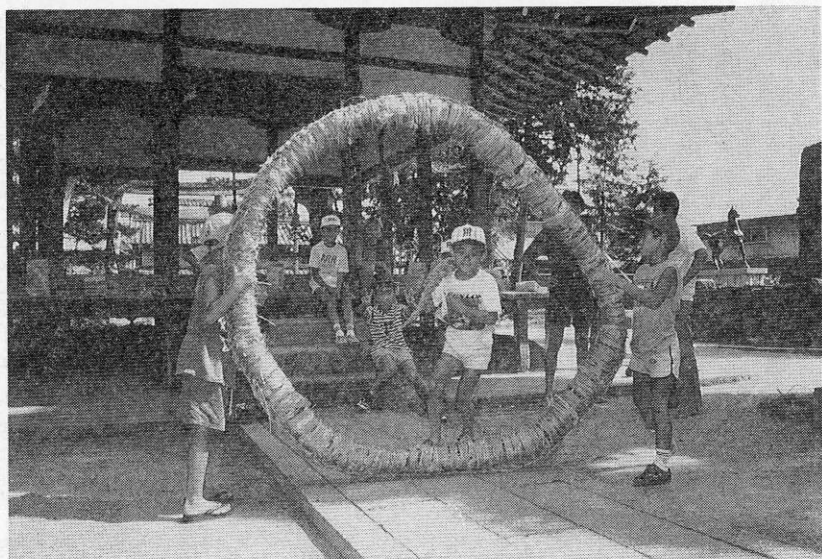
#### (四) 下麻生の水無月行事

毎年七月三十一日に蒲生町下麻生で行われる水無月は、  
鎮守である山部神社の境内での輪くぐりを中心とする行  
事の事で、地元の人々には後の野神祭へと続く豊年祈願  
行事の一環として理解されているようである。

行事は先ず二日前の七月二十九日に作り物をするところから始まる。午後二時頃、チグサッコと呼ばれる小学生の男の子達と、本年及び来年の野神の宿の家主二人、  
そして世話人の林弥二郎氏が山部神社に集まり、前もつ  
て根っこから引き抜いて一〇日間水に浸し、境内の拝殿

に干しておいたチグサを使って作り物をする。作り物は  
一抱えほどのチグサを束ね、茎をそろえて藁縄で縛って  
ゆくもので、これを大小（といってもさほどの大きさの  
違いはないが）二体ずつ計四体作り、やや小さい方の腹  
の部分には笹の枝を幾らか入れて膨らませる。そしてそ  
の先端は金銀の糸で結わえてその首を垂れさせるが、腹  
を膨らませた方の先端は二股にして結ぶ。できあがつた  
ものは大小一對ずつを一組として背中合わせにして括ら  
れ、それらは山部神社の本殿の両脇に三十一日まで飾ら  
れる。なおこの大小のチグサの作り物のことを地元では  
それぞれ「オス」、「メス」と呼んでいる。

三十一日の午前六時頃より、チグサッコと世話役の大  
人たちが山部神社に集まり、作り物を本殿から下げてい  
よいよ茅の輪作りに取りかかる。先ず作り物を解体し、  
そのチグサを竹で作った直径一・五メートル程の輪型の  
芯の周りに巻きつけ、笹の葉などを入れながら茅の輪を  
形づくってゆく。茅の輪には十字に青竹の担ぎ棒が付け  
られる。茅の輪ができ上がると余つたチグサで「ドラ」  
と呼ばれる注連飾り状のものを作り、また長さ約一・五



下麻生の茅の輪くぐり

メートルの青竹の両端にチグサを輪状にして括り付けたものを二本と、同様の竹にナタと鎌、そしてかけやを結びつけたものを一本、そして先程のドラを結びつけた竹を一本作って作業は終わる。出来上がったものは神社近くの集会所の倉庫に午後まで置いておかれる。

午後一時、下麻生のオトナ（戸主）たちが山部神社に集まりはじめ、本殿・脇社（津島）・稲荷という順番に参った後、隣接する赤人寺の本殿に集まっておおよそ年齢の順に座ってゆく。このうち大人衆と呼ばれる八人は羽織姿で年番の神主を中心に上座に着き、その接待は今年と来年の野神の宿を勤める戸主が下座にて行う。

午後一時半頃、チグサッコ達が山部神社の境内に集まってくる。チグサッコは小学生の男の子が勤めるものとされており、今年は下麻生の全小学生的男子一〇人が集った。先ず子供達は、今年の野神の宿主に連れられて日野川の対岸にある山のお参りに行く。そこでお酒と米を供え、一緒にいただいて帰ってくる。そして午後一時五〇分に寺の半鐘が叩かれて村中に触れられた後、赤人寺にてシュウシが始まる。シュウシには上座に大人衆

が座り、その左側にチグサッコ達が並ぶ。そして下座から今年の野神の宿主が挨拶を述べ、次いで神主と今年及び次の年の宿主との間で盃が交わされる。一方他の座の人々には酒が注がれ、豆菓子に入った重箱が上座から順番に回されてゆく。儀式が終わると今年の宿主が再び下手から挨拶を述べ、この後大人たちは常会に入り、子供達はお菓子袋をもらって席を立つ。

午後二時半頃、赤人寺を退席したチグサッコ達は、集会所に向かい茅の輪等を取り出してくる。チグサッコ達は四人が茅の輪を持ち、ドラを二人、チグサの輪の付いた青竹二本を一人づつが持ち、残りの二人がナタやかけやの付いたものを持ち、この順番に並んで境内の拝殿の周りを右回りに三周する。そして茅の輪の担ぎ棒を外すと、拝殿と本殿との間に敷かれた石畳に茅の輪を立て、その左右を一人づつのチグサッコが支えて茅の輪くぐりが始まる。その時には今年の野神の宿主が介添えにつく。チグサッコは年齢の小さい順に一人づつ茅の輪をくぐり、その際にはチグサで作ったドラを担ぐ。茅の輪くぐりは輪を八の字に十七回くぐり、十七回目には左右で茅

の輪を支える子供達が、くぐる子を阻止する為に輪を倒すことになっている。輪をくぐる子はこれを上手く通り抜けなければならない。なお例年ではこの茅の輪くぐりの際にチグサッコは「ミナヅキノ ワグチオハライ ベッタリコ」という唱え事をするということである。全てのチグサッコ達が茅の輪をくぐり終えると赤人寺に神主が呼びにやられ、子供達と同様の所作をする。チグサッコ達は神主が最後に輪をくぐる時には、出来るだけそれを妨害しようと輪の背丈をぐっと低くしたりする。

神主が輪をくぐり終えると行事はおしまい、チグサッコ達は茅の輪を担いで本殿の裏側にこれを置きにゆく。昔はくぐり終えた茅の輪は近くの日野川へと流しに行ったそうであるが、現在では境内の隅に放置され、あとで大人衆の人々が処分するのだそうである。

かつての茅の輪くぐりの行事は、四人の子供（チグサッコ）によって行われていた。その参加資格は長男（地元では「アニキ」と呼ぶ）のみであり、年齢も八・九歳以上と定められていた。当時のチグサッコはまるで座入りの如き制度で、初年度をシリゴと呼び、次の年はヒネ

リ、以下順にワキオトナ・オトナと続く。このオトナの権限はチグサッコの中では絶対であり、仕事の命令や貰い物の配分などは全てオトナが差配する。なおこのチグサッコの順番は下麻生においては絶対であり、結局この順がそのまま座入りの順番になったそうである。

茅の輪作りの為のチグサ集めは、七月の十九日ぐらいからチグサッコが日野川の川原などに分け入って根っこごと引き抜き、それを集めて「ノボリユ」と呼ばれる小川に漬けておいた。この場の上流では昔から洗濯をしたり肥桶を洗うことは禁じられていたそうである。

作り物は、現在のように山部神社の境内ですることはなく、日野川の川原でオス・メスを作り、それを山の神の両脇に供えたそうである。そして山の神の前でその解体をして、そこで先ずチグサッコ達は茅の輪くぐりをしたそうである。その後茅の輪等を山部神社に四人で運び（小さい子二人が茅の輪を担がねばならなかった）、現在と同様に輪くぐりをしたのであった。それが次第に茅の輪は境内で作るようになり、それでも最初のうちは山の神の所まで持って行っていくぐったのであるが、近年そ

れも簡略化されてしまった。

そのほかにこの水無月の行事に際し、昔は「ハラミダシゴ」と呼ばれる団子が各家庭で作られていた。これは米を挽いた粉を水でこねて皮を作り、中にあんこをたっぷりを入れて蒸し上げ、出来たものをイバラの葉（ガンタイバラ）に包むというもので、これは秋の実りが順調にゆきますようにとの祈りを込めて食べられたのだそうである。

### 三、蒲生町の水無月行事の特色

以上、前章において蒲生町内の五つの集落における水無月行事の様子について述べてきたが、これらの事例から蒲生町における水無月行事について概観してみると、その特色はおおよそ次のようになるものと思われる。

① 水無月行事の行われる日は、いずれの集落においても大体七月三十一日の前後である。

② 茅の輪の材料には、必ずチグサが使用される。

③ 茅の輪は一か所に設置されることなく、子供達等によって担いで運ばれるといった一定の所作を経て後

にくぐられる。

④行事には、年番神主や野神の宿主、ユトウなど、村の運営組織にかかわるものの介添えがある。

上記以外にもこれらの水無月行事の事例には、茅の輪の製作場所等において野神や山の神との関係が随所に見受けられる点や、またユトウの行事への関与（葛巻）、アマゴエヤキ（横山）、茅の輪を蛇に見立てて池の中洲の祠に奉納する所作（大塚）、チグサを田の取水口等の流れ水に漬けておく（葛巻・田井・下麻生）など、稲作における水利関係の事象にまつわる儀礼が水無月行事の中に取り込まれている点などが注目される。

また、本来茅の輪くぐりの意味と位置付けられている「禊」や「祓」という観点からこれらの事例を検証した場合、やや異なった印象を受けるものもある。

例えば茅の輪をくぐる対象について考えてみると、横山・大塚・下麻生の三集落に関しては茅の輪をくぐる事のできる者が非常に限定されており、集落の中の誰もが自在に茅の輪くぐりができる訳ではないのである。そのためこれら三集落の人々には、それぞれが行う水無月行

事に対して、いち個人としての禊や祓といった観念が希薄である様にも思われる。

実際各集落で執り行われる水無月行事の中で、明確に疫神送りの色彩を打ち出しているものは、中風除けを称する田井の茅の輪儀礼だけであり、そのほかの四集落については、表層的には茅の輪をくぐる事によって罪や穢れ、災厄や疫病をはらい浄めるといった意味合いを見出す事は困難である。

しかし一方では、葛巻や横山で見られるように、茅の輪を燃やした火によって迎え火や送り火が行われる事例があり、また田井や下麻生においては、かつて茅の輪を近くの川に流していたことが確認されているなど、それぞれの水無月行事が祓の儀礼であった事を窺わせる側面を内包しているのも事実である。

その他にも、大塚を除く四集落においては、水無月行事に子供の関与が不可欠である事や、葛巻・大塚・下麻生においてかつてこの日に食された「ハラミモチ（葛巻の呼称。下麻生ではハラミダンゴ、大塚ではイバラダンゴと呼ぶ）」の習慣など、これら五か所の事例には様々

な側面における示唆的な現象が散見される。

全体として蒲生町におけるこれらの水無月行事の事例を考えるならば、およそ次のような事が推測されるものと思う。

①それぞれの水無月行事は、各集落において集落の年中行事の一環として理解され、執り行われている事。

②水無月行事には、水田稲作における水利慣行等との関係が密接である事。

③各集落の水無月行事は、局部的には個人の穢れを祓うという側面を含みつつも、総体としては集落全体の儀礼として執り行われているという事。

つまりこれら五つの茅の輪くぐりの事例は、私的個人的な祓の儀礼としての意義よりも、より公的な意義を持って行われており、それは水無月行事が各集落における水田農耕に基づく年中行事の、一翼を担う儀礼として位置付けられているからであるとも考え得るのではないだろうか。

いずれにしても蒲生町の五つの集落で行われている茅

の輪くぐりの行事には、従来より説明され、一般に流布してきた茅の輪くぐりの意味に比して、微妙に異なった要因が含まれている事は確かであろうと思われる。

果たして蒲生町において茅の輪くぐりはどういった意味を持って伝承されてきたのであろうか。また茅の輪くぐりそのものの持つ本来の意味とは何なのか。次にこの蒲生町の五例を参考にして、茅の輪くぐりの意味について若干の考察を行ってみたい。

#### 四、考 察

——茅の輪くぐりの意味について——

これまで示してきたように、蒲生町の五つの集落における水無月行事には、その茅の輪くぐりについて今日言われているように、個人の罪や穢れを祓い浄めるための儀礼としての意味を表層上見出しにくい。というよりもむしろ、これらの事例は水にまつわる農耕儀礼としての色彩を、より強く帯びているように思われるのである。

水無月祓（夏越の祓）の行事は、現在でも全国各地の神社で盛んに行われており、京都の八坂神社などでは、



毎年この行事に合わせて茅の輪くぐりを行っている。そしてこうした神社において茅の輪くぐりの由来を尋ねるならば、必ずと言って良い程蘇民将来と素戔鳴尊の伝承が語られるのである。<sup>22)</sup>

本論の冒頭でも述べたように、茅の輪くぐりの儀礼は『釈日本紀』の備後国風土記逸文に記載された蘇民将来の伝承をその起源母体としている。<sup>23)</sup>しかしこの伝承の記述の中には、茅の輪を腰に帯びて素戔鳴尊への目印にしたという事が記されているのであって、茅の輪をくぐるといった所作について触れている訳ではない。

山中裕の『平安朝の年中行事』によると、平安期より以前の文献には、六月晦日の道具としての茅の輪についての記述はみられないとの事であり、例えば『延喜式』<sup>24)</sup>巻一の四時祭の「六月晦日大祓<sup>土月</sup>此」の項などにも、<sup>25)</sup>物料として茅の輪が挙げられているような事はない。

明確に「茅輪」と記された文献の初見としては、藤原氏嫡流の年中行事等を記録したものとされる『執政所抄』が挙げられるが、その「晦日御祓事」の記述では、<sup>26)</sup>茅の輪の大きさや実際に茅の輪をくぐったか否かといっ

た事については記されておらず、「茅輪」そのものの意味や儀式の中で果たしていた役割が必ずしも明瞭ではないのである。

同じく藤原氏の嫡流である藤原忠通（一〇九七―一一六四）の漢詩集『法性寺閑白御集』には、「六月祓詩」として「菅拔」を「如輪令首蒙」て夕刻に祓をする事が「世上久為流例態」であったと詠まれている。<sup>27)</sup>ここに見られる「菅拔」とは、『和訓栞』などに「すがぬき 菅貫と書り茅輪をいふ」と書かれている事などから、<sup>28)</sup>文献上はこの菅貫がいつの頃から茅の輪と同一視して認識され、現在に至っているようである。

菅貫については、平安朝の貴族達によって詠まれた歌の中に数多く見られる他、<sup>29)</sup>平安時代の宮中の儀式などを描いたとされる『年中行事絵巻』<sup>30)</sup>巻十、六月祓の中にも、その姿を認めることができる。ここには寢殿の中で幼児を抱いた乳母らしき女性が、女房の差し出す菅貫を首にかける姿が御簾越しに描かれている。

この菅貫という言葉は鎌倉期以降次第に使われなくなつたようで、それと前後して「輪越」<sup>31)</sup>や「御輪」<sup>32)</sup>、そし

て「茅輪」<sup>33</sup>といった記述が散見されるようになるのである。

大森志郎は「茅の輪行事の起源と意義」<sup>34</sup>の中で、「茅の輪がすがぬきと近い関係にあることは、諸家の意見が一致してゐる」とした上で、

用途からは茅の輪はすがぬきの一種であつて、大形で人のくぐるものをいひ、すがぬきは、小形で身につけるものをいふ、と区別できよう。茅の輪をくぐるとはいふが、すがぬきをくぐるといふ用例は聞かないやうである。

この意見を述べている。これに対し肥後和男は、両者の区別について懷疑の念を示しているが、いずれにしても菅貫と茅の輪くぐりとの間に、意味の上で何らかの関連があつたことは疑うべくもないであろう。ただ注意しておかなければならないのは、菅貫と茅の輪くぐりとが單語的に移行する過程において、くぐるという行為が付加されている事ではないだろうか。

もう一度『釈日本紀』より立ち返つて考えてみるならば、茅の輪くぐりの伝承はおよそ次のような順序を踏襲

するものと思われる。

- ① 蘇民将来の伝承は、茅の輪を腰に帯びる事による災厄からの回避であつた。
- ② 平安期、宮廷貴族達の間では菅貫を身に付けて水無月の祓をする習慣があつた。
- ③ 中世期以降の文献には、六月の晦日に茅の輪くぐりをする事例が多数見受けられる。
- ④ 現在、茅の輪くぐりは蘇民将来の伝承を母体として各地の神社で執り行われている。

ここで茅の輪くぐりそのものの起源にからむ蘇民信仰について言及するつもりはないが、以上のプロセスを是と仮定した場合、筆者は一連の伝承の形成過程における何らかの要因の影響を想起せざるを得ないのである。

ここでもう一度文献を見てみると、例えば『後水尾院年中行事』の六月晦日の項には、<sup>35</sup>次のような記述が載せられている。

御藏みな月の輪を調進す（中略）上臈のはしをもたへ、先左の御足をふみ入給ふ。次に右足。みな月のなごしのはらへする人は千とせの命のぶと云也と云

う歌を御口の中に唱給。此等も俗にならふ事にや。  
されど後成恩寺関白（一条兼良・筆者註）の公事根  
源抄にも此事書れたれば、いかさま昔より世俗に有  
りける事と見えたり。

この一例をもつての速断は禁物であるが、文中に示さ  
れた『公事根源』<sup>37</sup>を含め、過去において一部上層階級の  
間に、茅の輪くぐりの儀礼が「昔より世俗に有りける  
事」と見なされていた可能性は否定できないものと思う。  
そこで再び蒲生町の茅の輪くぐりの事例に立ち戻って考  
えてみたいのである。

蒲生町の五つの集落に伝わる水無月行事の事例につい  
ては、前節において水田稲作における水利慣行などとの  
関係が密接である事や、総体として集落全体の儀礼とし  
て執り行われている事などの特色を上げた。これらは蒲  
生町という地域的な特色抜きには語れないものではあろ  
うが、年中行事と言われるものが水田耕作等のサイクル  
を多分に反映した上に成立してきたとされる以上、茅の  
輪くぐりという儀礼を通して、文献と蒲生町の事例とを  
繋ぐ要因を模索する事は可能であると思う。

和歌森太郎は『年中行事』の中で次のように述べてい  
る。<sup>38</sup>

六月が田植後の月であるということ、これは、農民  
生活にとつてたしかに重要な印象を与えて来たこと  
であろう。そのために物忌が要求され、しずかに稲  
の無事なる成長を祈念することも行われたことは、  
考えやすいことである。また一層の精進を期して禊  
祓が行われることもあったとは、想像に難くないで  
あろう。農耕生産の拡張と進化に伴って、またいう  
ならば、新しい耕地の開拓などにつれて、水の順、  
不順に対する関心、虫の害に対する関心が強められ  
た結果、それらの不安の除去を乞うて、精霊をなだ  
める呪法がさかんとなり、行事も多様に変化してい  
ったと解することができるであろう。（中略）また  
聚落の町的都市的な発展は、人の身体を損う疫癘を  
除く呪法をしんけんに行うようにさせていったので、  
牛頭天王に結びつく夏祭を、町々に発達させて行っ  
たのであろう。

蒲生町の水無月行事が元々どのような意味で行われて

いたのかは不明である。しかし、稲の穂孕みの季節を迎え、田に最後の水を張るこの時期に、こうした形態を持つ茅の輪くぐりの行事が行われていることは、茅の輪くぐりの持つ重層的な意味を想起する上で、一考すべきものではないだろうか。

## 五、む す び

以上本論では、滋賀県蒲生郡蒲生町に伝わる水無月行事の事例を手掛かりとして、現在各地にて広く行われている茅の輪くぐりの持つ意味について、一部文献を引用しながら若干の考察を試みた。なお本論は、茅の輪くぐりの儀礼に象徴される様々な意味について考察する事をその主旨としており、茅の輪行事そのものの歴史的起源については、あえて言及を避けたつもりである。むしろ各地に伝承されている水無月行事から、茅の輪くぐりの儀礼が包含し得る様々な要素について研究する事が、今後重要となってくるのではないかと筆者は考える。その為にも、先ず蒲生町以外の地域における茅の輪くぐりについて、調査を進める必要があるものと思う。

最後に、御指導を頂いた佛教大学助教授の八木透先生と、貴重な体験をお聞かせ下さった蒲生町の皆様方、そして本論の構成に多方面からのご助言を賜った、蒲生町大塚出身にして京都文化博物館の学芸員、大塚活美氏に心よりの感謝を示して、本論の締め括りとしたい。

## 註

(1) 『広辞苑』第四版の「茅の輪」の項には、「六月祓に用いる、チガヤを紙で包み束ねて輪の形に作ったもの。これをくぐって身を祓い浄める。」とある。

(2) 『新日本紀』巻七、述義三、神代上(『新訂増補国史大系』八所収)の「備後国風土記逸文」についての記述は次の通りである。

素戔鳴尊乞宿於衆神<sup>一</sup>

備後國風土記曰。疫限國社。昔北海坐志武塔神。南海神之女子乎与波比乎坐尔。日暮。彼所蘇民將來。二人在伐。兄蘇民將來甚貧窮。弟。將來富饒。屋倉一百在伐。爰塔神借三宿處。惜而不借。兄蘇民將來借奉。即以三栗柄為座。以三栗飯等。饗奉為爰畢出坐。後尔經年率三八柱子還來天詔久。我將奉之為報。答曰。汝子孫其家尔在哉止問給。蘇民將來答申久。己女子与三斯婦侍止申。即詔久。以茅輪令着於腰上。隨詔令着。即夜尔蘇民之女子一人尔置

天。皆悉許呂志保呂保志天後。即詔久。吾者速須佐  
雄能神也。後世仁疫氣在者。汝蘇民將來之子孫止云  
天。以茅輪着腰。上詔隨詔令着即夜在人者將免  
止詔後。

- (3) 今堀太逸は「疫病と神祇信仰の展開―牛頭天王と蘇民  
將來の子孫―」（『仏教史学研究』三六―二所収、一九  
九三年）の中で、「（前略）茅の輪は、牛頭天王信仰と  
して説明され、年中行事として定着したものである。牛  
頭天王が疫病の根源であり、疫病をもたらす悪神（眷屬）  
たちを統御し支配する神であることより可能となった信  
心であるといえよう。」との見解を示している。

- (4) 茅の輪くぐりそのものについての民俗学的な立場から  
の代表的な研究成果としては、大森志郎の『やまたのを  
ろち』（一九七〇年、学生社）が挙げられる。

- (5) 田辺治雄「近世村落共同体と水論―近江国蒲生郡川守  
村・林村を中心として―」（『滋賀県地方史研究紀要』六  
所収、一九七八年）参照。

- (6) この五里井については、斎藤卓志の「蒲生の水田と水  
利」（『昭和60年度調査報告、蒲生町の民俗―滋賀県蒲  
生郡蒲生町―。中京民俗二三』所収、一九八六年）に詳  
しいが、その中で斎藤は、「葛巻が二ヶムラ分を負担」  
してきたのであるとして、地元の人々が主張する「二つ  
の権利の所持していた」との伝承とは別の見解を示して  
いる。

- (7) 一九九四年度の葛巻のユトウは安田源治氏（昭和19年  
生まれ）であった。

- (8) 『牧野新日本植物圖鑑』によると、チグサは通常観賞  
品として人家に栽培されて野生には見えないそうである。  
ここで茅の輪の材料として使用されるのは同じイネ科の  
植物のチガヤであらうと思われるのだが、蒲生町ではそ  
れを一般にチグサと呼んでおり、以下本論では地元の発  
音を尊重したいと思う。

- (9) 地元ではこの日を「施餓鬼の日」と言う。

- (10) ガンタチイバラは学名をサルトリイバラというユリ科  
の植物で、西日本ではササラとも呼ぶ。このイバラの葉  
に団子などを包む風習は蒲生町の他、滋賀県の甲賀郡な  
ど各地に見られる（『民俗学研究所編『年中行事図説』等  
参照）。

- (11) 社守になる前にも二年間の見習期間がある。この大人  
衆への座入りには、家の長男でなおかつその人に男の子  
が生まれた順番に入ってゆく。昔は櫻神社の社守が済む  
とオトナと呼ばれたそうである。一九九四年の社守は綾  
井正信氏（昭和9年生まれ）であった。

- (12) このアマゴエヤキの行われる場所は、横山の山の神及  
び野神の祀られている山の一角にあり、その山は全山天  
狗前古墳群という史跡となっている。現在ではこの山の  
間を名神高速道路が走っている為、アマゴエヤキノバと  
山の神とは名神を挟んで離れてしまっているが、かつて

は山の神の場所が現在の高速道路の辺りにあったのだそうである。なお山の神近くにある野神は、昔横山の集落付近の田の端にあったのだが、圃場整備の際現在の地に移されたとの事である。その他この山には「山王さん」という祠がある。

- (13) このフルゴはかつては農業用水として整備され、利用されてきたものであるが、現在では圃場整備の進行と共にその姿を消している。

- (14) 大塚の集落のうち、小字名東大塚と呼ばれる地域(戸数約三〇)は、昭和期の集団入植政策の結果成立した新興集落であるらしく、昔から旧来からの大塚の行事には参加していないとのことである。

- (15) 大塚内には三つの組があり、順番に水無月行事を勤めているが、このうち北出では当番の年が回ってくると北出にある稲荷講の順番によって神主が決定される。稲荷講は北出の全十二組(一組は二〜三軒)が月番交代で勤めるもので、この順番に一月から六月迄と七月から十二月迄の半年交代で年間二人が選ばれる(一九九四年度の神主は前期を安川善兵衛氏、後期を松本茂治氏がそれぞれ担当した)。二人の仕事の主なものは一二月二日の山の神と七月三十一日の水無月、そして八月二十二日の虫送りである。その他に毎月三日に米粉で作った団子を野神と鎮守である八幡神社に供える仕事がある。

また神主の決め方について昔は各組から代表者をそれ

ぞれ出して、くじによって決められていたそうである。その内訳は山出・北出が二人づつ、上のツツミが一人の代表を出して計五人でくじを引き、ここから二人の神主を選んだのである。また北出については、現在では隣村の市子川原に併合されてしまった何軒かの家が、今ツツミとして大塚の行事に参加していたらしいとの事である。これらの組によって水無月行事の作法には若干の違いも生じている。

- (16) 野神の宿主は下麻生にある一〇組のムラ組(一組は四〜五軒)によって順番に回ってゆき、担当の組の中から適任者が選ばれて宿を受けるのである。

- (17) 下麻生の大人衆八人は、まず見習いとなり、次の年に神主を勤めてそのあと六年間を大人として過ごし抜けて行くというもので、見習いになる年代は大体50歳くらいであり、そのことは座入りと言われる。

- (18) この唱え事については『建久三年皇太神宮年中行事』(『續群書類従』一二、神祇部所収)の「一晦日 輪越神事次第」の中に、茅の輪くぐりの作法として「六月ノ名越ノ祓スル人ハ、千年ノ命延トコソキケ」との唱え事をくぐる度に唱える旨が記されている。同様の記述は『公事根源』や『後水尾院年中行事』、『年中重宝記』『三条家奥向恒例年中行事』などにも見られ、蒲生町の事例との接点を探る上で興味深い。

- (19) この後テグサッコ達は八月二十八日の下麻生の野神祭

に参加する。この日子供達は赤人寺の本堂で相撲を取って稲の豊作占いをし、野神の御神体を次の野神の宿の家に届ける役目を果たす。

(20) 現在下麻生では、田井と同様に茅の輪は一月十五日のドンド焼きの日に燃やして処分するのだそうである。

(21) なお本論では触れなかったが、近在の集落である蒲生町市子殿でも毎年七月三十一日に水無月行事が行われる。市子殿では、野神の前で茅の輪を作った後、これを雨宮神社の鳥居に括り付けて茅の輪ぐりを行う。またその他に市子殿では、この日に長さ三〇センチ程の藁束を作り、これで通りかかった若い女性の尻を叩くという儀礼が見られる。

(22) 例えば滋賀県長浜市の長浜八幡宮で配布された「茅の輪神事について」というチラシには、「武塔天神（すさのおのみこと）が途中、日が暮れ、宿をからんとしてその所に住める、二人兄弟 蘇民将来、巨旦将来の許に至りて、先富み榮えている弟の巨旦将来に宿を求められたが拒絶せられ、次に貧しい蘇民将来の家に泊り、粟めし等をいただかれ優遇された。そのうろはしい心に報ゆるため、蘇民将来の子孫は茅の輪を作って腰につるしておれば、その年の流行せる疫病災難を免れる、という事を教えられた。（後略）」との説明がなされている。

(23) 註(2)参照。

(24) 山中裕『平安朝の年中行事』（一九七二年、塙書房）

滋賀県蒲生郡蒲生町の水無月行事

二二一頁の他、大森志郎の「茅の輪行事の文獻と民俗」  
『東京女子大学論集』一一―二所収、一九六一年）にも同様の指摘がある。

(25) 『延喜式』卷一、四時祭（『新訂増補国史大系』所収）の項に次の様に記されている

六月晦日大祓准此

五色薄繩各二尺。絁帛一丈五尺。絹二疋。金装横刀二口。金銀塗人像各二枚已上東西文部所領。庸布三段。木綿五斤二兩。麻廿斤十兩。梟十二兩。烏装横刀六口。弓六張。篋二百株。鍬六口。鹿角三頭。鹿皮六張。米二斗。酒六斗。稻四束。鰻二斤。堅魚七斤。腊一石五斗。海藻卅斤。鹽六斗。水盆六口。匏六柄。榲桲把。馬六疋。祝詞料庸布五段。短帖一杖。

右晦日申時以前。親王以下百官會集朱雀門。卜部讀祝詞。事見儀式一

(26) 『執政所抄』（『續群書類従』二五七、公事部所収）の

「晦日御祓事」の内容は以下の通りである。

晦日、御祓事、

御禊身

八足供物 居茅輪立小幣、供瓜茄子饅、

麻布 綿 折敷供物

茅人形 解繩 散米 居坏

折敷一枚居之、在栗栖野高坏、

菅祓三所御料、各置折敷居高坏。三所御料

同前、

已上旬出納為<sub>レ</sub>例勤ニ仕之、

陪膳四位、

役家司職事 已上衣冠

御隨身立明 冠襦 件等役人所司催<sub>レ</sub>之、

役下家司、衣冠 出納等

進菅藏人形所々、

藏人所、御台盤所 副別御料、姫御前御台盤所同之、

侍所 政所 御隨身所 君達

已上旬出納為<sub>レ</sub>例備進之、

三所御政事、

藏人所 侍所 所司勤ニ催之、政所召ニ仕丁、

- (27) 藤原忠通『法性寺関白御集』の「六月祓詩」(『群書類  
従』一三三、文筆部所収)には次の様に詠まれている。

六月祓詩

世上久為流例態 林鐘晦日禊除衆

詠無他詠千年頌 期有定期六月風

苔地燎幽迎夜処 石湍水冷欲秋中

未知何物号菅拔 結草如輪令首蒙

- (28) 『増補語林和訓栞』中、「すがぬき」の項参照。

- (29) 例えは源国信(一〇九六―一一一一)の「源中納言懷

旧百首」(『桂宮本叢書二〇』所収)には、「六月祓」と

題して「かそふれはのこりすくなきすゑのよに ちよと

いのりてすかぬくやいかに」という歌が詠まれており、

その他にも『為信集』や『拾玉集』など、菅貫は様々な  
詩歌集の中に詠み込まれている。

- (30) 吉田光邦「年中行事絵巻考」(『日本絵巻大成』八巻所  
収、一九七七年、中央公論社) 参照。

- (31) 『鹿島宮年中行事』(『續群書類従』七二、神祇部所  
収) 六月晦日条。

- (32) 『満濟准后日記』(『續群書類従』八七〇、雜部所収)  
応永二十一年六月二十九日条他。

- (33) 『殿中以下年中行事』(『群書類従』四〇八、武家部  
所収) 六月晦日条。

- (34) 大森志郎「茅の輪くぐりの起源と意義」(『東京女子  
大学論集』九―一所収、一九五九年)

- (35) 肥後和男「茨木神社の輪くぐり神事」(『日本神話研  
究』所収、一九五六年、河出書房)

- (36) 『後水尾院年中行事』(『史籍集覧』二七、新加雜九  
二所収) 六月晦日。

- (37) 一条兼良(一四〇二―一四八一)の『公事根源』(『日  
本文学全書』二二所収)には次の様に記載されている。

大祓といふは、百官悉く朱雀門にあつまりて、祓をし  
侍るなり。六月十二月二度あり。(中略) また今日は、  
家々に輪をこめることなり。

みな月のなごしのはらへする人は

千年のいのちのぶといふなり。

この歌を唱ふるとぞ、申しつたへ侍る。



(38) 和歌森太郎『年中行事』（一九五七年、至文堂）一三六頁参照。

(39) 蒲生町での茅の輪ぐり調査に際し、お話をうかがったのは次の方々である。

安田源治氏（昭和19年生まれ・葛巻）

綾井正信氏（昭和9年生まれ・横山）

山田孝雄氏（昭和20年生まれ・横山）

望月善雄氏（昭和21年生まれ・横山）

福永絹子氏（昭和10年生まれ・市子松井）

松本茂治氏（昭和9年生まれ・大塚）

岡起代司氏（大正10年生まれ・下麻生）

三島浩三氏（昭和3年生まれ・下麻生）

皆様にこの場をかりて改めて御礼申し上げます。

#### 〔主要参考文献〕

1、大森志郎 「茅の輪行事の起源と意義」（『東京女子大

学論集』九―一所収、一九五九年）

2、大森志郎 「茅の輪行事の文献と民俗」（『東京女子大

学論集』一一―二所収、一九六一年）

3、大森志郎 「茅の輪と蘇民将来」（『日本文化史論考』所収、一九七五年、創文社）

4、肥後和男 「茨木神社の輪ぐり神事」（『日本神話研究』所収、一九三八年、河出書房）。

5、山中 裕 『平安朝の年中行事』（一九七二年、塙書房）

6、中村義雄 『魔よけとまじない―古典文学の周辺―』（一九七八年、塙新書）

7、和歌森太郎 『年中行事』（一九五七年、至文堂）

8、大塚活美 「大塚の山の神」（『民俗文化』二〇〇号、一九八〇年）

9、中京大学民俗学研究会 『昭和60年度調査報告、蒲生町の民俗―滋賀県蒲生郡蒲生町―』（『中京民俗』二三、一九八六年）

#### 〔付記〕

本論は、一九九四年九月に行われた佛教大学鷹陵史学会第三回年次研究大会において、筆者がその要旨について発表したものに、一部加筆・修正してまとめたものである。

